
ハンタジックスター

中畑 健一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒアンタジツクスター

【Nコード】

N9823P

【作者名】

中畑 健一郎

【あらすじ】

僕は佐藤富士鷹^{さとうふじたか}。

普通の日本人だ。

最近、東京でいろいろな事件が起きている。
まあ、札幌に住んでいるから関係無いけど、
そんな時に一人の女の子が家にやって来た。
その女の子が僕が魔法使いだって言った。

普通に暮らしてた、男が一人前の魔法使いになるまでの話

第1話 変な女の子（前書き）

下手くそですが、よろしくお願いいたします

第1話 変な女の子

僕は、佐藤富士鷹。さとう ふじたか

今はフリーターで独り暮らし。

最近、東京でいろいろな事が起こっている。

ニュースによると、完全犯罪が1週間に15回、しかも、女性ばかり。

警察は犯人を探しているらしいけど、手がかりがつかめないらしい。

あとは、都心で停電が起こったことがあった。

信号機がつかなくなったせいで、事故が多発したそう。

と言っても、僕は今、札幌に住んでいるから、関係無いんだけど

今日はすることがないから、家でのおんびりしていた。

ピン、ポーン

ドアチャイムが鳴ったので、玄関に向かった。

「はい、どちら様？」

反応しないので、ドアを開けてみると、そこには、変な眼鏡をした、女の子が立っていた。

「あの、何のようですか？」

イライラしながら、言うと、女の子が眼鏡を外して

「あなたは魔法使いよ」

はあ？

第2話 話は本当？

この人はなにいつてるんだ。

「あの、何を言ってるんですか？」

この人、大丈夫かと思いつながら、言った。

「だから、あなたは魔法使いです」

「・・・」

何も言えないでいると

「中で話します」

と言った女の人が、勝手に部屋に入った。

「で、どこにそんな証拠、あるんですか？」

僕はこの人が言ったことがよく分からなかった。

「この眼鏡が証拠よ」

女の人が眼鏡を外して、僕に渡してきた。

顔をよく見ると、結構可愛かった。

「あなたが魔法使いなら、私は赤く光ってるはずだわ」

仕方がないので、眼鏡をかけてみると、本当に赤く光った。

「私の名前は、さいとう齊藤果菜よ」

「僕の名前は・・・」

「佐藤富士鷹でしょ。それくらいなら、知ってるわ」

「・・・ところでなんで、この眼鏡をかけるとあなたが赤く光るのですか？」

齊藤果菜とかゆう人がめんどくさそうに、

「私が魔法使いだからよ」

「それなら、僕が魔法使いとゆう、証拠になりませんよね」

何を言われても、これは聞きたかった。

「魔法使い以外は使えないの。その眼鏡」

この人の言ってることが、正しいなら、僕は魔法使い？

「なら、あなたが魔法使いだとゆう、証拠を見してください」

斉藤は変な杖を出して、

「なに、持ってきてほしい？」

本当にやるのか、この人？

「うーん、じゃあ食器棚にある皿を」

と言うと、斉藤は唱え初めた。

しばらくすると、食器棚から皿が出てきて、ここまで来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9823p/>

ヒェンタジックスター

2011年1月8日23時52分発行